

## 第3回 上田市小中学校のあり方検討委員会 会議録

### 1 日 時

令和元年5月24日（金） 10時00分から12時00分まで

### 2 場 所

上田駅前ビル パレオ5階 上田市教育委員会 第1会議室

### 3 出席者

#### ○ 委 員

委員 長	桜井 達雄
副委員 長	関 和幸
委 員	飯島 俊勝
委 員	金井 希巳枝
委 員	金井 律子
委 員	菊池 秀樹
委 員	竹花 のり子
委 員	中川 智浩
委 員	早坂 淳
委 員	福澤 行雄
委 員	松本 千恵子

#### ○ 教育委員会

教 育 長	峯村 秀則
-------	-------

#### ○ 事務局

教 育 次 長	中沢 勝仁
教育総務課長	石井 正俊
学校教育課長	緑川 文明
生涯学習・文化財課長	竜野 秀一
教育総務課 企画担当係長	西澤 透
教育施設整備室 計画担当係長	平田 佳久
学校教育課 学校教育担当係長	馬場 雅久
学校教育課 学校教育担当係長	田中 彰
学校教育課 指導主事	青沼 務
学校教育課 指導主事	児玉 隆
生涯学習・文化財課 主任	伴 美佐子

## 〔次 第〕

### 1 開 会

### 2 教育長あいさつ

### 3 事務局職員自己紹介

### 4 上田市小中学校のあり方の検討について

#### 【桜井委員長】

会議次第に従い、議事を進行させていただく。次第「4」の「上田市小学校のあり方の検討について」、まず、(1)の「第2回検討委員会の概要」について、事務局から説明をお願いしたい。

#### (1) 第2回検討委員会の概要（事務局説明）

##### 【石井教育総務課長】

委員の皆さまには会議録を配付させていただいているので、それに沿って主な意見等について申し上げたいと思う。今回は、懇話会の提言書の中の「目指す子ども像『上田市としてどういう子どもを育てたいのか』」、また、「上田市として特色のある教育」について、最初に上田市の教育体系、それから上田市の教育支援プランについて、ご説明をさせていただき、ご意見をいただいた。

「会議録」9ページをご覧ください。早坂委員から「連携」についてのご意見があった。「連携」の言葉について若干の古さがある。いわゆる足し算をしようという発想で使っても崩れてしまうことがある。「連携」の発想だとこれからの社会、この国を維持できない、地域を維持できないので、「連携と協働」という発想が大事であるというお話をいただいた。その中で、委員長からもこの委員会においては、10ページの上の記載のとおり、「本検討委員会とすればこのような言葉を使いながら」ということで、そこを意識しながら議論を進めていくお話があった。それでは、本題の意見だが、11ページの関委員長からのご意見では、「ふるさとを知るということから、上田の自分の地域のいちばん身近なことや歴史を知る中で、自分の地域に誇りを持つ。それをもって上田において上田を学んでいくことが大事だと思う。」とのご意見があった。12ページ後半では、松本委員より「多様な体験を通してということは外したくない」、「豊かな自尊感情」、「己を大切にす気持ちの自尊感情を大切に育てながら」、「学び続けるというキーワードもほしい」、「豊かな心を持ち未来を生き抜く子ども」、そのような形にすれば「全部が総括される」、「キーワードで考えてほしい」とのご意見があった。13ページの後半の方では、飯島委員から「自分が上田市に住みたいという郷土意識が非常に大事だと思う」、「上田市に住みたい、そのような教育がされている社会環境がある上田市をどうやってつくっていくかが一番の基本だろうと思う」とのご意見があった。次、14ページの中川委員からのご意見は、子どもと話している中で、なかなか地域の話が出てこないことや体験をすることのお話もあった。「体験することは楽しい。面白かったとは言ってくれるが、子どもたちが大きくなったときに、上田はよかったね。上田はいいなというふうになっていくのかという不安はたくさんある。でも続けなければそこで途切れてしまう。続け

ることが大事だということ」とのご意見であった。飯島委員からは、「体験が大事」ということや、「なかなか結果がでなくてもやめさせてしまったら何もならない」、「いいこと、悪いことではなく、大人がいいと思うことをたくさん体験させて、その積み重ねが郷土愛や本人の資質向上につながっていくのだからと思う」というご意見もあった。17ページで、桜井委員長が少しまとめたいただき、「ふるさとに学ぶ」について、「各学校でふるさと学習を展開していることはとても大事な視点だと思う」、「子どもたちが世界へ羽ばたいていったとき、あなたのふるさとってどういうところですか」、と聞かれたときに、きちんと説明できる、そういう子になってほしいと思う」ということ、「郷土に誇りや愛着をもっているからこそ、グローバルな力につながっていく」というような話もあった。以上、主なご意見、特徴的なご意見を申し上げさせていただいた。キーワードとすれば、「本当の連携」と、また、「ふるさとを愛する心」や、「体験についての大切さ」といったようなことが議論の中で何度か出された。

## **(2) 質疑・意見等 (第2回検討委員会の概要)**

### **【桜井委員長】**

ただ今、第2回検討委員会の概要について事務局からのご説明をいただいた。委員の皆さまから何かがご意見、ご質問等をお願いしたい。事前に資料をお配りいただいたときに、目をとおしていただいていると思う。質問等がなければここで時間をかけずに進めさせていただきたいと思う。

特段の質疑等がなければ、次に進めさせていただきたいと思う。それでは、次に「4の(3)」の「検討体系 ③ 縦の連携 【教育の体制 ①】」について、事務局から説明をお願いしたい。

### **(3) 検討体系 ③ 縦の連携 【教育の体制 ①】 (事務局説明)**

#### **【緑川学校教育課長】**

縦の連携【教育の体制 ①】は、子どもたちの育ちを切れ目なく一貫して支援するという一方で、現在の上田市で取り組んでいる「幼保小中高大の連携推進」を進めている。「資料1-1」をご覧ください。こちらは幼・保育園から小学校へスムーズに移行できるように、幼・保ではアプローチカリキュラム、小学校はスタートカリキュラムを行っている。アプローチカリキュラムは、就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに、幼児期の学びが小学校の生活や学習でつながるような工夫をされた5歳児のカリキュラムである。「資料1-2」もご覧ください。こちらは神科第一保育園の平成31年度のカリキュラムだが、ほか各園でもこのような形で実施されている。例えば、9月から10月をご覧ください。上から3つ目の①友達や先生の話最後まで聞く。相手の話から気持ちを汲み取り会話を楽しむ活動、11月から12月の上から3つ目の③、1日の生活の流れが分かり時計を見て始まりや終了などを知る。1月から3月には、いちばん上の③午睡の時間を短くしてクラス活動に変えるなど生活リズムを整える。ということで、小学校へ行くと昼寝の時間はないのでこういった取り組みも行っている。いちばん右側に就学までに身に付けたい力3項目がある。「生活する力」の3番目には、【1日の生活過程】1日の流れの見通しを持って生活する。「聴く力・学ぶ力」には、【聴く力】話す人の方を見て聞き取るようにする。いちばん下の「集団適応の力」の【規範意識】は遊びの中でルールを守ろうとする。

このようなことを行っている。次に「資料1-3」をご覧ください。これは中塩田小学校の「小1スタートカリキュラム」である。「スタートカリキュラム」は、幼児期の育ちや学びを小学校の学習を中心とした上へうまくつなげるため、小学校入学後に実施される効果的、関連的カリキュラムになっている。例えば、朝の活動というところで、リズムあそびやジャンケン列車、読み聞かせがある。吹き出しには、保育園のような身体を十分に動かして発散させたり、朝のリズムを整えるような活動をしている。1時間目に入ると吹き出しには、朝の活動をゆったり楽しく行い、急には授業に集中できにくい児童が自然に無理なく授業へ気持ちを向けていられるようにした後に、通常よりゆるやかなくくりの40分を行う。また、スタート学習は20分、20分の2段構えの構造となる。とあるが、3ページをご覧ください。例えば、4月の第2週、9日（火）時点となっている。朝の活動では、申し上げたようなリズム遊びから始まり、1時間目については（SCA）とあるが、資料枠外の右下に詳細を記載している。40分、45分授業は、授業を通して同じ科目をやるのではなく、最初の20分を元気に歌おうということで音楽をやり、残りの20分で国語を行う工夫をして授業を進めている。各学校によっても違うが、資料7ページまでのところを第6週5月の月上旬までこのような活動が行われている。次に、「資料4-1」をご覧ください。移行支援、プレ支援シートである。左上にある「対象の年長児」は、①学校教育課及び保育課兼任指導主事による就学の相談において、移行支援が必要と判断された園児、②上記以外で、保護者と園長が移行支援を必要と判断された園児に対して幼・保が支援の情報について「資料4-2」を使って小学校生活が円滑に行えるように支援をしているものである。戻って、「資料2」をご覧ください。こちらは「小中連携のための教員配置事業」を上田市では平成22年度から行っている。この資料は4月23日に行われた小中連携の連絡会の資料である。上田市では中学の数学の専科の先生が小学校で算数を教える取り組みをしている。

#### 1 事業のねらいは、

- (1) 小中教員が連携しながら指導方法を工夫した授業を行うことで、算数の学力と学習意欲の向上を図りたい。
  - (2) 小中の教員が相互に授業方法を研修し合うことで、授業改善や指導力の向上に繋げること。
  - (3) 小学生が中学校教員の授業を受けることを通して、中1ギャップ解消など、中学校進学に対する不安の軽減に結び付けたい。
  - (4) 中学校進学後の個別の生徒支援等にかきたい。といった目的で行われている。
- 2 小中連携配置校は記載のとおりである。
- 3 年間計画の概略もご覧のとおりだが、4番の10月の時期にも授業参観が出てきている。次のページをご覧ください。
- 4 本年度の各配置校の指導単元と指導時数は、学校によって条件も違うことから、時間数、総時間数、指導数については差があるが、このような形の表で1年間行っていく予定である。

次に、「資料3-1」をご覧ください。「小中大の連携」UD（ユニバーサルデザイン）化に向けた塩田地区の取組（計画）である。

## 1 目的

塩田地区では、平成28年度より、長野大学と連携して実施し、共生社会を目指したインクルーシブ教育の実現に向けた取り組みを行っている。

各小中学校の通常の学級においても発達障がい等の配慮を必要とする児童・生徒が存在し、と共に学んでいる。そのため、通常の学級の授業を「全員に分かる授業」に改善する必要がある。今年度も、塩田地区4小中学校では、「全員に分かる授業」改善を目指した職員研修を行っている。また、今年度はこの2年間の取り組みの成果を市内全域に広めていきたいと考えている。

## 2 対象の学校

塩田地区3校と1中学校

(東塩田小学校・中塩田小学校・塩田西小学校・塩田中学校)

## 3 指導・支援機関は、長野大学の早坂先生、丹野先生にご指導あたっていただいている。本日は早坂先生がいらっしゃるので、この取り組みについて少しお話をお願いしたい。

### 【早坂委員】

ご説明いただいたように、平成28年度から長野大学が立地している塩田地区において、中学校1校、小学校1校をはじめとして、授業の「ユニバーサルデザイン化」を図っている。「ユニバーサルデザイン」という言葉はあまり馴染みのない言葉かもしれないが、この資料に書かれているような発達障がいを抱えている、あるいは視覚刺激が敏感なお子さん、聴覚刺激が敏感なお子さん、あるいは外国籍のお子さん、今、教室の中には非常に多様な子どもたちが1カ所にまとめられている。多様な子どもの前にして、先生1人が中心となった今までのような一斉授業のあり方では、必ずしも効果的な学びが十分に行えないのではないかという、これまでのある種の反省のもとに、また、インクルーシブ教育、共生社会、さまざまな違いを乗り越えて、みんなで1つになっていくための足がかりを学校で作っていく必要があるのではないかと、こういった大きな目標の中で授業改善を図っている。ただし、発達障がいのおさんがいるが、必ずしも特別支援教育メインの授業ではなく、授業の中で普通の授業を受けてしまうといった居心地の悪さであるとか、あるいは学びが十分に発展していかないお子さんから、私たちが気づきももらって、ある種の発達障がいを抱えたお子さんを炭鉱のカナリアに見立てて、その炭鉱のカナリアの敏感なお子さんからの鳴き声をしっかりと汲みとって、そこをきっかけに全員が考えられるような授業を目指していくと、ある種の発達障がいの子に合せて授業を受けるとか、難しい授業を簡単にしていくとか、そういうタイプのものではなく、発達障がいのお子さんから学ばせてもらいながら、全員にとっても定型発達の子どもにとっても幸せな授業づくりを今、塩田地区の先生方とともに進めているところである。

### 【石井教育総務課長】

続いて、小中一貫教育について若干触れさせていただきたい。「資料5」をご覧ください。小中一貫教育については、あくまでも小中連携の1つの事例という形で紹介したい。小中一貫教育については、本検討委員会に先立って、平成29年度に開催された「上田市小中学校のあり方研究懇話会」で取り上げられたことで、筑波大学・樋口直宏教授の講演、また、意見交換を行いながら、

委員の皆様からご意見を伺った経過がある。懇話会においては、小中一貫教育、義務教育学校の有効性について、共感する意見とその必要性について慎重な意見と、両方が出された。「資料5」に戻るが、小中一貫教育だが、これは小学校、中学校の9年間を通じた教育課程を編成し、一貫性を持たせた系統的な教育を目指すことで小中連携教育の1つということである。具体的にはどのような形になるかということは、①として、1人の校長のもとで1つの教職員組織が一貫した教育課程を編成実施する9年制の学校で教育を行う「義務教育学校」がある。これについては、平成27年に学校教育法の改正により制度化されて、平成28年に施行になったものである。もう1つは②と③の教育になるが、組織上は独立した小学校及び中学校が義務教育学校に準じる形で、一貫した教育を施すといったパターンである。ここにはないが、小中一貫型小学校、中学校の形態には、施設一体型といって同じ敷地の中で学ぶもの、施設隣接型といって隣接する敷地において行うもの。施設分離型は、異なる離れたところで連携していくといったパターンがある。次に3ページをお願いしたい。平成29年度における設置数ということで、若干資料は古いが全国の状況が記載されている。県内の事例でいくと、義務教育学校では、信濃町の信濃小中学校、大町市の美麻小中学校がある。小中一貫型の小中学校は、佐久穂町の佐久穂小中学校がある。またこのほかに茅野市は施設分離型になるかと思うが、小中一貫教育を適用しているところがある。諏訪市は、新聞報道を見るとこれから進めていく計画があるといっている。4ページ以降は評価ということで、総じて一般的によく言われるメリットとすれば、いわゆる「中1ギャップ」の緩和や解消、系統的、連続的な学習によって効果が高まることが期待される。異学年交流により、精神的発達が期待される。また継続的な児童生徒に対する指導ができる。このようなことがメリットとして挙げられる。一方でデメリットとすれば、人間関係が固定しやすいこと。小学校高学年のリーダーシップであるとか、自主性が養われないこと。また、母体が大きくなるためになかなか目が行き届かない。そのような恐れがあることが挙げられている。

#### 【桜井委員長】

ただ今、「縦の連携」について、説明をいただいた。

これより、次第の「4の(4)」の「質疑・意見交換」に入りたいと思う。

ここでは「子どもたちの育ちを切れ目なく一貫して支援する」という視点から、「縦の連携」について、現在の取り組み、成果や課題等に対するご意見や、今後さらに必要な取り組みなどについて、ご意見をいただきたいと思う。

また、小中一貫教育についても小中連携教育の事例の1つとして、制度に関するご意見や、今後のあり方についてご意見をいただければと思う。このことについては、昨年度の懇話会でも勉強をさせていただき、意見交換をさせていただいているが、改めていただければと思う。

それでは、先ほどの事務局からの説明について、ご質問、ご意見等のご発言をお願いしたい。

#### (4) 質疑・意見交換 (検討体系 ③ 縦の連携)

##### 【竹花委員】

「資料4-1」の幼保・小移行支援について、プレ支援シートを見ると、障がいをお持ちのお子さんなのだが、この移行支援という言葉が、どこかへ移行させるというような意味でこのような言葉があるのか。学校を替えてしまうことなのか。もう1点は、早坂先生の説明のユニバーサルデザイン化の教育は、これは全国的なものなのか、それとも先進的にやっているものなのか、その点を教えてほしい。

##### 【桜井委員長】

それではまず、前段の方で、移行の言葉の説明をお願いしたいということによろしいか。

##### 【竹花委員】

よろしい。

##### 【緑川学校教育課長】

移行という言葉は、幼稚園や保育園でどんな活動をされてどういう特徴があるとか、障がいがある場合もそうだが、これからの小学校生活に何らかの手を入れる必要があるのではないかということについて、「資料4-2」でいろいろな状況について書いていただく。これを小学校の方へ事前にお渡ししておく中で、小学校側とすればそれをもとにクラスの区切りや編成に活かしたり、そのような支援が事前に必要であったり、学校体制として教職員が知っていたり、対応するものについて移行会議等を通して、学校生活を安心して送れるような形にするものになっている。

##### 【竹花委員】

移行という言葉なのか。

##### 【緑川学校教育課長】

そうである。

##### 【竹花委員】

ほかの学校へ移すことかと思っていた。

##### 【緑川学校教育課長】

先ほどの説明で資料の順番も行ったり来たりして、いわゆる幼保から小学校へ替わっていくところの部分で、説明する順番を変えさせてもらった。

##### 【竹花委員】

段階的に移行することです承した。

### 【桜井委員長】

ユニバーサルデザインについてご説明いただいた早坂委員にお願いしたい。

### 【早坂委員】

ユニバーサルデザインについては、全国的な流れがまず1つある。数年前に授業のユニバーサルデザイン化の学問領域に設定した学会も誕生し、このユニバーサルデザインという言葉を使って授業改善を図っていこうとする自治体は全国に複数ある。ただし、上田市で、塩田地区でやっているユニバーサルデザインの特質を申し上げると、障がいであるとか、病気であるとか、年齢であるとか、性別であるとか、国籍であるとか、何かの課題を抱えている人、集団の中に自分をうまく位置づけることが難しい人にとっては、自分が集団の中に位置付けることを難しくさせている要因を見つける視点。少しややこしいかもしれないが、例えば、身体が上手く動かせない人が何で日常生活の中で困難を生じさせてしまうのかという、その原因がどこにあるのか。その人の医学的な見地からすると、その人の身体の中に上手く体を動かせない、例えば、神経の不接続であったり、器質的な要因を見出そうとしたりするが、ユニバーサルデザインはそうではなく、その人が車いすに仮に乗っていたとしても、車いすですどこへでも行ける社会であれば、体の不自由というのは障がいにはならないだろう。この発想がバリアフリーかユニバーサルデザインに転換するとき非常に大きなポイントとなる。塩田地区ではこの部分をすごく大事にしている。つまり、発達障がいのお子さんは、確かに出産期の中に中枢神経の発達に医学的に見ると何らかの課題があるのだが、その子に課題があると見るのではなく、その子のそのままを受け止めたうえで、授業の中で授業を変えることによって、環境を変えることによって、その子の居心地をよくしてあげる。それにかなり特化したのが、塩田地区のユニバーサルデザインの大きなポイントである。ユニバーサルデザイン、物事をユニバーサルデザイン化していくことで12観点ぐらいあるが、あまり観点が多すぎると、学校の先生もどこに注目していいのかわからなくなってしまうので、塩田地区はこのうちの3つにポイントを絞っている。これも全国的な動向と少し違う特質であると思う。3つというのはこの資料の中に書かれているので、後でご覧いただければと思うが、教員が子どもへの関わり方を肯定的に、つまり、温かい言葉に変えていくということと、教員の言葉だけ指示をより具体的にしていく。あれとか、これとか、しっかりするとか、ちゃんとする、など曖昧な副詞ではなく、具体的に何をしたらいいのか示してあげるという、具体化を目で見分けるように資料を提示してあげる視点、「肯定化」と「具体化」と「視覚化」の3点に絞って授業改善をお願いしているのも全国的な傾向と少し違った特質なのかもしれない。長野県でも信州型というのを出しているのだから、信州型ユニバーサルデザインというのものは始まり、それを先行する形で上田市ではユニバーサルデザインを1つのきっかけとした授業改善をしていく。そのような形である。

### 【桜井委員長】

ほかにはよろしいか。

**【早坂委員】**

「資料1-1」で示されているように、幼稚園、保育園で掲げられている、子どもにこのように育ってほしいという姿。それと、小学校へつなげていく理念の接続というか、思いの接続というか、あるいは教育プログラムの接続、ソフトウェアの接続、こういったものが実質的に有機的につながっていくには、実際にそこで働いている人と人の連携というものが不可欠になると思う。具体的に幼稚園の先生、保育園の先生、小学校の先生が、このような形で意見交換しているとか、このような形で連携をしているのだという事例がたぶんあると思う。そういった点についてご教示いただきたい。

**【緑川学校教育課長】**

まず、7月に幼保小中の連携会議があり、そこにはそれぞれの中学校区の先生方に集まっていたり、そこで情報共有していただいている。それ以外にも学校の先生が保育園へ出向き、園の様子を見ていただいている。逆に保育園の先生が時間のあるときに、子どもさんを連れて小学校の様子を見にくるなどの活動をしている。

**【金井（希）】**

保護者からの意見だが、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムというのは、今初めて資料として見せていただいている。どこまで保護者に説明をしているのかを教えてください。園の方と学校の先生との連携があったとしても、保護者の方には全く説明がない。現状として、けっこう不安に思っている保護者が多く、このようなものを資料としていただければ、こういったことをしているのだと分かるが、今私が初めて知るので、ほかの方にも知る機会があればいいと思う。

**【緑川学校教育課長】**

小学校の関係か。

**【金井（希）】**

保育園に子どもが1人、小学校3年生に上がった子どもが1人いる。どちらに対しても今のところ、この資料のように、このようなことをしている説明をされたことがない。

**【緑川学校教育課長】**

清明小学校長の菊池委員がいらっしゃるので、小学校でやっているところをご説明いただきたい。

**【菊池委員】**

このような具体的なカリキュラムそのものを、1時間の授業の流れや、先ほど、朝、少しこういう時間を取ってということについて、こういった時間割表のような形でお示しするものは、具体的にそこまでやっていない場合もあると思う。ただし、学年のPTAや小学校に上がる前に幼保の頃に学校へ来ていただいて、説明会等でお話をする事になっているが、なかなかそこができていない部分もあるかもしれない。

### 【金井（希）】

保育園でも、ここまで教育カリキュラムというものが細かくあるならば、保護者の方にもこういったものを見せていただいた方が、年長児はここまで必要とされているのだということが具体的に分かるが、今回初めて見る資料であったので、こういうものがあると安心できると思える親御さんが増えると思う。もう少し開示していただきたい。幼保の段階でも、学校の方だけではなく、幼保の方も助かるのではないかと思う。

### 【緑川学校教育課長】

幼稚園、保育園でも今、このような形で出ているが、昔からこのようなことはやっていた。ただ、より移行できやすいということで、さらにこういったものを小学校が利用し、幼稚園、保育園ではこういうものをつくって、今までやっていたことと同じようなことだが、例えば小学校では普通に1時間目国語、2時間目図工というような時間割になっている。それをさらに学校の中ではこういう形でよりできやすいような形でやっている。また学校の先生も含めて、今度幼保小中の連携会議もあるので、そのようなことも保護者の皆さんにはお伝えできるかと思う。

### 【桜井委員長】

大切な視点だと思う。保護者の方に安心していただくという視点から、とても大事なことだと思う。神科第一保育園と中塩田小学校の方に出ている。おそらく多くの保育園、幼稚園、小学校の先生におかれては、自然に行われていることで余計に発信がない。

### 【緑川学校教育課長】

先ほども申し上げたが、昔はそれぞれに幼稚園・保育園は幼稚園・保育園、小学校は小学校、当然そこへ通う子どもたちは同じなので、よりスムーズに通えるようにと、今まで幼稚園・保育園で必要な力、小学校でやっていく生活の流れを幼稚園・保育園のときから少しずつ身につくような形の中で、昼寝の時間はずっと幼稚園・保育園で昼寝をしていると、小学校へ行ったときに眠くなってしまおうというようなことがある。そのような生活のリズムも含めてやっていただくような形で細かなカリキュラムが先生方の中で行われていくと思う。

### 【金井（希）】

先生方だけだともったいない。子どもを育てるのが初めての保護者はすごく不安だったりする。今、発達支援のお子さんも多いので、そのような親御さんに対しても、このような具体的なものがあると分かりやすいのではないかと感じたので知らせてほしい。

### 【緑川学校教育課長】

また機会を見つけて、こういったこともやっているということをお知らせしたいと思う。

### 【桜井委員長】

個別の学校ではなくて、例えば上田市の中ではこういうことをやっているということをアピールできればということであった。

### 【飯島委員】

神科第一保育園が幼保小連携のモデル園の事例だと思う。こういうカリキュラムは、保育園すべてで立てている。ただ、開示しているか開示していないかという、職員間の中で共通でやっている。保護者まで「見える化」しているかという「見える化」はしていない。当然保育していくためには、こういうカリキュラムを立ててやっている。当然入園のときに、私なりには例えば、1年間保育方針でこういう形でやっているという説明会が必ずあるはずだから、その中できちりお話をしている。入所するときは必ずこういう話はしなさいよとなっているから、たぶん、新しく入る保護者の方は承知いただいて、それぞれの園を選別しているのかなと思う。保育園に聞いていただければ、このようなものを出していただければと思う。

### 【金井（希）】

聞くということも保護者には分からない。せっかくこんなに具体的なものがあるのに、実情としてはこれを見ただけでたぶん安心する親もいると思う。

### 【飯島委員】

安心される保護者ばかりならありがたいが、逆にここまでやらなければいけないのかと、心配し過ぎる親もいる。全て開示することが、全ての子どもたちにとって良くなるのかというところでもない。やはりその方にあった形で開示していかないと逆効果にもなることもある。

### 【松本委員】

今お聞きしていて、カリキュラムという形ではきっと保護者には伝えていないと思う。例えば、学級だよりで明日の予定で、例えば、入学したときにごあいさつのやり方を勉強するとか、整理整頓を習ったとか、そういう活動の形で伝えていると思う。それをカリキュラムという形で、これはこういう目的を持ってやっているという形では言っていないと思う。読み取り方みたいなものを、もしかしたら学校でこうやって育てているというところに説明の言葉が少なかったかもしれない。やっているというように思うし行事で発信していく。例えば、明日は幼保の先生方が連携して授業をし合うことで、連れて行くとかこっちに来るとか、連絡会だったらこういうことがあるとか、活動の形で保護者さんにお伝えしているのではないと思う。それから、ユニバーサルデザイン化ということも、私も長いこと学校現場を離れているが、例えば、1枚の紙のグランドデザインをPTA総会で学校長が説明するとき、ユニバーサルデザインを学校のねらいとしてこういう子どもを育てている、具体的にはこういうことをやっているというようなことも、たぶんお見せしてPTA総会をやっているのではないと思う。塩田地区は見えていないのに失礼だが、塩田地区では当然、学校長が今年度の教育の重点はこういうことだと言っていると思うが、そのところが、今、金井（希）

委員がおっしゃったように、カリキュラムを見るとびっくりしてしまうというところがある。実際にはもっとやさしいことを発信していると思う。

#### 【金井（希）】

小学校の説明会では、保育園のときに、こういったアプローチプログラムやスタートカリキュラムがあるとか、学校とそのような連携をしているといったような説明はなかったと思う。

#### 【松本委員】

個別には、毎日こういうことを目指してやったら、こういうことができるようになったというようなお知らせみたいなものをたくさんいただいた。今考えてみると、そのときに保育園ではどういう育ちをねらってこのお手紙を書いてくださったのかということまではきっと読み込めなかったかもしれない。発信そのものは伝わっているのではないかと思う。そのところを課題であるとするれば説明不足、カリキュラムを見せるのは厳しいものがあるかもしれないが、学校でも努力はしているように思う。

#### 【桜井委員長】

松本先生からは、1校1校でそれぞれ説明したかしないかという話ではなく、やはり通わせている保護者にとっては、具体的なことではなくても、こういう精神でやるということが伝わっていない部分があるのだろう。具体的にこうだというのではなく、幼稚園と小学校がうまく連携していることをもう少し全体的にアピールできるようなことも必要なかというご意見だった。

#### 【峯村教育長】

今、金井（希）委員にご指摘いただいた点は、この内容の良さに触れていただいたことだと思う。ただ運用の仕方がどうかということについては問題があるが、上田市としてはスタートカリキュラム等で、子どもがスムーズに幼稚園・保育園から小学校へ行く策を練っているということでご理解いただきたい。今日は、その価値についてご意見をいただきたいと思う。運用についてはこれから検討させていただきたい。

#### 【桜井委員長】

それではよろしいか。一旦そういうことで、保護者の方に安心な情報を受けていただくことは大事な視点だと思う。では、ご説明を受けた上でこの「縦の連携」についてご意見をいただきたい。

#### 【竹花委員】

今、教育長がおっしゃられた価値の部分だが、「資料2」の小中の連携のための教員配置事業について、これは必要なのだと思った。今年の4月から、丸子中央小学校の学習支援ボランティアに入らせていただいている。たまたま英語の学習支援に携わらせていただいて、5、6年生は教科ではないかというくらいに難しく、先生たちには英語がどんどん入ってくる。2020年から必修になると、1人の先生が小学校のクラスを全部受け持つというのはすごく労力を要すると考えた。

たまたま中学の先生が小学校へ入ってくれていて、数学の時間を持ってくださるというのが、子どもたちにとっても先生にとっても非常にありがたいことなのだと思います。全校に行き渡っているわけではないが、例えば、小中一貫教育みたいな流れもある中でいけば、できるところからはじめるとすれば、教員配置事業というのは必要な位置を占めるのではないかと感じた。他の教科にも広がっていけばいいという感想を持った。

#### 【福澤委員】

本校は第一中学校で、教員配置事業については、今年1年目ということで指定を受けていただいた。「資料2」の表にあるように、神川小学校は専門の職員1名を置かせていただいている。今、竹花委員がおっしゃったように、小学校は当然メリットがあると思うが、中学校の教員はやはり昔のままであってはいけない、変えていかなくてはいけない。小学校の先生の授業を見せていただいたその後を受けて授業をやるので、小学校の先生方のことも大事にした授業を勉強するというのもすごく大事だと思っている。今年は若手の先生を2人出向かせている。たまたまそのうちの一人は小学校免許がないが、免許がなくてもいいとのご指導だったので、こういう機会でもなければ小学校へ行って研修する機会もないということで行かせている。本人にとってもこれからの教員生活においてプラスになると思っており、しっかりとやっていただきたいと思っている。

#### 【飯島委員】

福澤委員の話聞いて私も質問しようと思った。今の小中連携といいながら、先生を派遣したり受けたり、小学校・中学校2つの免許を持っている先生と持っていない先生の割合はどうか。あるいは中・高は持っているけれども、中学しか持っていない、いわゆる両方持っている先生はどの程度採用して行き来できるような環境であるのか。そのところははっきりしているのか。そのほかに、今後、新聞紙上でいうと、専科の先生をだんだん小学校でも増やしていこうという動きがあるように聞いている。その辺りの動きがどうなっているのか教えていただきたい。

#### 【峯村教育長】

免許状の関係だが、その方が卒業した大学の形態によって小中の免許がとれる学校ととれない学校がある。例えば、信州大学の教育学部は小中の免除がとれる。そうではない大学は中学校、高校しかとれない。教員の採用試験のときに採用する県が分かって採用するわけだから、県下の中学校の教員数のニーズや小学校のニーズを考えながらやっているはず。ただ、確かに小中連携を深めていくには両方の域を持っていることが望ましいので、県教委としても両方の免許を持っていることが望ましい立場ではある。データが手元にないので割合は申し上げられないが、やはり両方あった方がいい。専科については英語が小学校で評価された。そこで上小地区は4校に専科が配置されている。専科は2校を掛け持ちで、2倍の学校に対応できるので8校英語の専科が配置されている。ただし、文部科学省は担任がやるのが望ましい、担任が英語を指導と言っている。しかしながら、長野県教育委員会は専科を配置してくれているので、そのずれが生じているのかと思う。ほかに理科専科、音楽専科が小学校に配置されている。それから音楽の免許を持っているのだが、小学校の免許を持っていない音楽専科もいる。それは、小学校では音楽だけ限定して授業をすることになっ

ている。家庭科も持ってもらいたいという要望もあるが、それは免許法で超えるわけにはいかない  
ので、担任が家庭科を教える。そこをサポートに入ることについては許されている。いずれにしろ、  
免許が主体になるので免許を持っていないと授業はできないことは大原則である。複数の免許を持  
っていると、県はポイント制で少し優遇してくれる部分もあるが、いちばんは人物、適正をみるわ  
けだから、適正が優先されるのだと思う。

#### 【桜井委員長】

いろいろ市内の学校でも具体的に取り組みがなされている。この資料で先ほど意見があった。初  
めて見る資料だという話があったが、いろいろな取り組みがなされているということがお分かりい  
ただけたらどうか。ほかによろしいか。

※ 桜井委員長の都合により途中退席。以降、議事終了までの進行は関副委員長。

#### 【福澤委員】

移行支援について本校の課題はたくさんある。1つは不登校のお子さんがたくさんいる。本当に  
課題ということですと取り組んできているが、移行支援をいかにするかということだと思う。3  
学期に入ってから何人もいるが、秋頃から小学校と相談をして、移行支援の会議を開いている。子  
どもによっては何回も何回も繰り返してやってきている。もちろんそれでやったからといって、全  
員が全員中学へ行って不登校ではなく、元気いっぱいにはならないが、なかにはその中学へ行って  
小学校は苦しかったけれども、1日も休んでいない生徒が本校に2人ぐらいいる。だんだんに良  
くなってきている生徒もいる。やはり移行支援というのはとても大事だと思う。

#### 【関副委員長】

時間の関係もあるので、次に進めさせていただきたい。

それでは、次に、「4の(5)」の「検討体系 ④ 横の連携 【教育の体制②】」について、  
事務局から説明をお願いしたい。

#### (5) 検討体系 ④ 横の連携 【教育の体制 ②】

##### 【竜野生涯学習・文化財課長】

この後、伴主任の方で具体的な事例報告をさせていただき前に、私の方から概要を説明させてい  
ただく。「資料6-1」をご覧ください。コミュニティスクールの関係だが、学校と家庭、地  
域が共に連携し合って学校を支える仕組みである。資料の裏面の下のの方に図がある。また、お手元  
に「子どもがまんなかよーい、どん」のボランティアハンドブックの14ページに同じ図がある。  
コミュニティスクールについては、この図にあるように学校、家庭、地域が子どもをまんなか、  
お互いに連携しあって子どもを支えあうというものである。特に、長野県は信州型コミュニティス  
クールということで、コミュニティスクールをさらに改善して取り組んでいる。①学校運営の参画、  
②学校支援、③学校評価機能の3つの機能を持たせた運営委員会の設置をし、それぞれが年間一定

の回数を重ね、委員として学校支援ボランティアを組織化し、①②③の要件を満たした場合に信州型コミュニティスクールとした形で取り組んでいる。信州型について端的にいうと、学校を地域が寄り添い支えていくことをもとに取り組んでいくことが信州型コミュニティスクールである。上田市の取り組みについては、平成28年度全国において信州型コミュニティスクールの要件を満たしている。資料裏面を見ていただくと上田市の取り組みについては、統括コーディネーターに伴主任を配置し、全体のコーディネーターを統括して学校を支援する本格的な取り組みがはじまった。学校コーディネーターについては、地域の方がなる場合、公民館の職員がなる場合、学校内部でなる場合、それぞれの多様性に応じて、地域、教育委員会が支える仕組みとなっている。また、先ほども見ていただいたボランティアハンドブックなども作成し、それぞれの取り組みを支援する。また、資金集めについては当方と通じて地域に協力していただいている。具体的な内容については、伴主任の方から説明させていただく。

### 【伴生涯学習・文化財課主任】

昨日、峯村教育長よりご指導があり、事例の発表をユニバーサルデザイン化しなさいということで、具体的に取り組みの様子分かるようにスライドを準備させていただいた。スライドをご覧いただきながらお聞きいただきたい。なお、スライドの使用している文字も学校でも使われているユニバーサルデザインフォントである。こういうものを使って誰もが分かりやすい、そういう授業を上田市でも進めている。上田市のコミュニティスクールは、先ほど竜野課長の方からご紹介があったように平成20年度からはじまっている。平成20年度当時コミュニティスクールは、国も2系統あり、国のコミュニティ・スクール、それから学校支援地域本部事業の2本柱が行われていて、コミュニティ・スクールについては上田市教育委員会の学校教育課が担当、そして学校支援地域本部事業は当時の生涯学習課が担当していた。この流れは、現在も国のコミュニティ・スクールがやっている学校の側面から見ると「社会から開かれた教育課程」、そして生涯学習的見方からいくと、「地域とともにある学校づくり」などと言われているが、同じコミュニティスクールを表しているのかと思う。平成20年度にはじまった上田市のコミュニティスクールの取り組みは、実は2本立てのまま平成25年度までいた。そのまま2本柱でいくのはどうなのかということで、平成26年度になり、学校教育課と生涯学習・文化財課として市内の公民館が手を取りあってコミュニティスクール事業にあたっている。このことについては、特筆すべき点は、長野県内の市町村の教育委員会の中でも学校教育家と生涯学習・文化財課、さらに公民館も一緒にかかわってのコミュニティスクールの実施をしているところは、唯一上田市のみである。このプロジェクトチームの中を研修部会、広報マニュアル部会、予算部会の3つの部会にわけて平成27年度からスタートしている。そしてさらに平成29年度、昨年度の4月1日からは私が統括コーディネーターということで配置され、みんなでコミュニティスクールに取り組んでいる。それぞれの部会では、研修部会で、ボランティアの皆さんと研修会や交流会を、広報マニュアル部会で、先ほどお手元に差し上げた冊子を作成したり、市民の皆さまへのお知らせ、行政チャンネルやホームページを使ってよりコミュニティスクールを知っていただくための努力をしている。そして予算部会では、平成29年度から各校に30,000円程度の消耗品費と上田市のコミュニティスクールのボランティアにかかわっていただいている皆さまへの保険の予算を取らせていただいて加入の回収を行った。29年度ボランティ

ア加入保険に加入していただいたボランティアの皆さんは、1,305名、昨年度は1,343名の加入をいただいた。このことによって上田市教育委員会は、市内のコミュニティスクールでかかわっていただいているボランティアの皆さんのお名前、どういう活動をしていただいているのかをようやく把握できるようになってきた。このボランティア研修会は、市内全域から集まっていたら研修会の後で撮った記念撮影である。このボランティア活動について文科省では、「地域学校協働活動」と呼んでいる。地域の中で関わるボランティアが、仲間づくりをして研鑽をしていく活動をプロジェクトチーム、上田市教育委員会が中心に行っている。

具体的な学校でどんな取り組みをしているかは、「資料6-2」の一覧表をご覧いただきたい。清明小学校では、月曜日は、職員朝会のときに地域のお母さんを中心にした読み聞かせを朝の15分間にとっていただいている。第一中学校では、放課後の学習室を地域ボランティアによって毎週水曜日に行い、そこには長野大学の学生さんや地域の皆さんにかかわっていただいている。コミュニティスクールがはじまったその当時、塩田中学校は大きな課題を抱えていた。校舎の改築もしなければいけない状況の中で、地域ぐるみで子どもたちの育ちを支えたいことから、塩田中学校ではコミュニティスクールの取り組みがはじまった。まずは、塩田中の古い校舎だが、地域の皆さまの力を借り、改築中も花を絶やさないように、子どもたちの心に潤いを与えたいという思いで環境整備がはじまった。これは当時の塩田公民館の緑の連続性という公民館講座に参加して下さった皆さまに声掛けをしてはじまったことである。校舎が新しくなって、常にきれいな花が咲く現在の塩田中学校の花壇である。地域の皆さんがつくって下さる花壇のほかに、生徒が学級単位で花壇を受け持って花にあふれた取り組みになっている。この環境整備の取り組みをコーディネーターとしてかかわって下さった方は、塩田公民館の当時の次長、竜野課長である。10年経った今もこの活動が続いている。次に神科小学校の1年生給食の配膳の様子である。昨年4月11日と記載があるが、小学校1年生といえばつい昨日まで保育園児であった。給食の配膳をすることでもなかなかままならなくて、担任の先生1人では子どもたちの指導をするのに大変時間がかかっていた。そこへ地域ボランティアの皆さんが参加して下さり、配膳のお手伝いをして下さったところ、時間内に給食がとれるようなことが起こっている。なぜ神科小学校でこんな取り組みがとれるのかというと、実は平成24年から神科小学校では、授業の2時間目の授業と3時間目の授業の間の20分間の休み時間に毎日、地域ボランティアの皆さんがボランティアルームに集まって、子どもたちと遊びの相手をして下さっている。これは、ボランティアルームの前にあるちょっとした広場で子どもたちが考えた「てにぼん」という遊び。板を持ってピンポンの玉を打つゲームだが、子どもたちはこの遊びが大好きで3月上旬の肌寒い時期でも半袖になって遊んでいる。このようにボランティアの皆さんがきて下さることが日常的になっていた。ボランティアルームにきて声を掛けて、担任の先生がこういうことを助けてほしいという依頼があると手伝っていただくように、手伝っていただける素地ができあがっている。神科小学校はこれだけではなく、落ち葉がたくさん落ちてきて片付けが大変な時でも地域のボランティアの皆さまが出勤する。みんなで落ち葉を集め、集めた落ち葉で焼き芋大会の取り組みがはじまっている。また、浦里小学校でも、平成20年度からコミュニティスクールに取り組んで地域の皆さまがいろいろな場面で子どもたちの育ちを応援して下さっている。大勢の方が子どもたちと一緒に野菜づくりにかかわって下さり、子どもたちは農業を身近に感じたりしている。浦里小学校の子ども日記を読ませていただく。「今日は、コスモス交流会だった。

学校の裏の阿鳥川沿いに私たちの育てた苗を植えた。お助け隊の皆さんが植え方を教えてくれた。きれいに咲くといいなあ。終わったら交流会で私たちが考えた遊びをしておいしい漬物を食べた。最後に感謝の気持ちを込めて肩もみもした。」浦里小学校は、平成31年2月12日現在、ボランティアにかかわって下さった延人数2,882人、3月末に教頭先生からのご報告を受けたところ、2,900人を超えたということである。次に上田市の北小学校で取り組んでいるキャリア教育の様子である。北小学校では、5年生から市内の事業所に行って子どもたちが働く学習をしている。職業教育が目的ではなく、多様な人たちと深くかかわり、いろいろな人を取り込めるような教育をしたいという学校の願いがあつてのキャリア教育の学習である。北小学校から太郎山方向に上っていくと、外国製のバイク屋がある。そこの息子さんである男の子だが、「将来は父ちゃんのバイク屋を継ぎたいと思っている。僕は働く学習は自分の家でしたい。けれどもバイク屋になりたいと言ったら、お前に触らせられるバイクはないと言われた。」それでコーディネーターは働く学習の事業所を探し、ホンダ長野中央の整備センターで働く学習の受け入れをしていただいた。その方は、ホンダカーズの中で整備士さんを指導する先生で、男の子に一日かかりきりで車の整備を教えてくれた。また、別の5年生の女の子のその日記では、「待ちに待った職場体験だった。ドキドキして、歯が震えてカチカチと音を鳴らしてしまった。幼稚園の女の子が私の名前を聞いてくれた。名前の2文字が同じだったので、おしかったねえという話からはじまった。とてもうれしかった。それで次々と仲間が増えてきた。すごくうれしくて時間が過ぎてほしくなかった。でもあつという間だった。また会えたらいいな。」このように小学校5年生が多様な人たちを取り込んだ活動をしている。北小学校ではクラブ活動の講師をすべて地域の方が受け持って下さっている。その陶芸クラブの1コマでは、御年83歳、通称「つーさん」と呼ばれるこのおじいちゃんが子どもたちに陶芸を教えてくれている。この児童の中には特別支援級に在籍する子どももいる。でもクラブ活動の中ではみんな同じで自分の選んだクラブ活動で1年を過ごしている。クラブ活動の最後の日にボランティアの皆さんと一緒に記念撮影をした。北小学校では、ボランティアの皆さんと先生方が年3回、一堂に会して、こういう雰囲気の中で「どういう風に子どもたちを育てていきたいのか」話し合い（総会）をする。どの方が先生でどの方がボランティアさんとは分からないぐらいの笑顔の総会の様子である。この中で先生方は、自分たちは今学期こういうことを目標に子どもたちと学級の運営をしていきたいと発表しながら、それをうんうんと聞いてくれるボランティアさんがいる。

先ほど申し上げたボランティア活動は、文科省では「地域学校協働活動」と呼ぶが、この活動を進めていく中で、地域における人びとのつながりが生まれてくる。すると、人・物・事が活性化して、地域全体が活性化するこういうことをコミュニティスクールでは目指している。

そんな中でも、上田市は課題が山積である。学校運営委員会は立ち上がったけれど、一体どんな話し合いをしたらいいのかわからない。学校評議委員制度も残っている中でどんなふうにしていったらいいだろう。この取り組みの中ではコーディネーターという役割がとても重要である。どういう人をお願いするか、どういふかかわりを持っていくのか。先生方の働き方改革もある。地域の方があまり押し寄せると、先生方はさらに忙しくなってしまうのでどうしたらいいだろう。学力感も変わってきている。さらなる少子化は進んでいる。予測不能な未来が待っている。

このような中で取り組んでいるコミュニティスクールだが、この笑顔を見ていただきたい。つーさんと子どもたちが、地域に根ざして地域のよさを知り、地域の温かさにつれ、活動をしていかれ

るということは素敵なことだと思っている。地域の子どもたちは「希望の種」である。ぜひこの希望の種をすくすく育ててもらいたいと思っている。地域はこの希望の種の蒔かれた大地だと思う。大地が凍りついていたら種は育たない。コミュニティスクールを進めながら、この土地の地熱を上げ、子どもたちの種が芽吹きやすいようにすることがミッション。芽吹いた芽は、保護者の愛情や先生方の努力でお日さまが燦々と当たるように伸びていくのかと思っている。そんな思いで上田市教育委員会ではコミュニティスクールの事業を進めている。

#### 【関副委員長】

ただ今、「横の連携」について、説明をいただいた。

これより、次第の「4の(5)」の「質疑・意見交換」に入りたいと思う。

ここでは、「学校・家庭・地域・関係機関が連携し、子どもの育ちを支援する」という視点から、「支援」ということについて、どこまで、また、どのようにかわることが、子どもたちや学校にとって良いのかなど、「支援のあり方」や、その方法などについて、ご意見をいただきたいと思う。

それでは、先ほどの事務局からの説明について、ご質問、ご意見等のご発言をお願いしたい。

#### (6) 質疑・意見交換 (検討体系 ④ 横の連携)

#### 【早坂委員】

今、伴さんから非常に心温まる上田市内での実践を見させていただき、上田市で親として、ああいうところに暮らしているんだなと実感したところである。私から1点お伺いしたいのは、「資料6-1」の「1」の「コミュニティ・スクール」に、コミュニティとスクールの間に「・」の中黒が入るコミュニティスクールと、「2」の「信州型コミュニティスクール」との違いが市民の方によく分からないと言われるポイントである。国のコミュニティ・スクールについては、先ほどスライドにも出てきた市内の浦里小学校と川西小学校が国のコミュニティ・スクールとして根付いていて、それ以外は信州型コミュニティスクールになっている。国のコミュニティ・スクールについては、資料の1行目に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第47条の6に平成29年度に、設置が努力義務化されている。つまり、全国の学校はコミュニティ・スクールに変わる努力をしなければならないことが平成29年度以降、法律の改正によって方向性が変わってきている中にある。長野県は信州型コミュニティスクールをやる中で、その努力をしているのだということを文部科学省に言っているが、文部科学省からはそれだけでは必ずしも十分ではないというプレッシャーが県教委の方に降りてきていると伺っている。お伺いしたいのは、上田市が今後、国のコミュニティ・スクールに変わる努力を求められたときにどういう対応をされようとしているのか。国のコミュニティ・スクールでなくても、今、十分に各学校が地域の特性や地域の資源をうまく活用しながら、子どもたちの笑顔をつくっている中で、今後もっと地域に権限を与える形のコミュニティスクールを求められていくときに、上田市は、長野県でもいいが、こういった形で国の制度改正に向き合っていこうとするのか。

### 【峯村教育長】

校長会でこのような話をしている。「上田市にある35校それぞれの輝きを放ってもらいたい。切り口は自由だが、金太郎飴のようになってもらっては困る」と。コミュニティスクールも同じで地域に合ったものがある。上田市のコミュニティスクールは、文部科学省のコミュニティ・スクール2校も含め、みんな輝きを放っている。私はそれでいいと思う。そうではなくて、例えば、国の方から何かあって金太郎飴的になったとしたら、今の予想をしながら言うてしまうのではないだろうか。そこに暮らす地域の人たち、その学校に学ぶ子どもたちはみんな違う。本当に中心において考えなくてはいけないのは、まずは子どもである。子どものためにどうしたらいいのか考えて進めていくべきだということである。

### 【関副委員長】

早坂先生、よろしいか。

### 【早坂委員】

峯村教育長が言われたように、今、それぞれの学校がそれぞれの輝きをしっかりと残せる形で学校が地域とともにまさにあると私は理解している。この制度改正、法改正の流れの中で輝きを失わないように、我々はしっかり学校と地域とともにあらねばいけないという思いを新たにさせていただいた。

### 【竹花委員】

学校の校長先生がいらっしゃるのでお聞きしたい。「この問題の中に支援のあり方」、「どこまでどうかかわることが」ということを昨日考えていた。今年4月から入らせていただいて、学校の運営方針に則ってやはり自分たちもそれに則っているかという点と、先ほど峯村教育長がおっしゃったように、主体は子どもだからあまりやり過ぎてもどうなのか。できないところをやるのだが、最後は失敗してもいいから、途中は子どもがやって、あとはそれを見守る形でいかないと、私たちがどんどん入ることによって、学校がかえって手がかかってしまうことになったら、またそれも本末転倒になってしまう。やはりそれは学校と連携を密にとりながら進めていくが、やはりどういう子どもに育てたいのかという学校の運営方針に反れないよう、そこだけは外さないようにしながらともにやっていくような形で、何かアドバイスをしてもいいのかいけないのか。学校はどう考えているのか。学校はたぶん何をやってもありがとうございますと言ってくれると思う。でも、かえって迷惑をかけていることもあるのかとも思う。

### 【菊池委員】

かえって迷惑をお掛けしているのではないかというお話であるが、いや、そんなことはありませんとしか申し上げられない。今、おっしゃられたように、学校もこんな子どもたちに育てたいという思いの考えを共有していただくことがとても大切だと思っている。先ほど北小学校のボランティアの方と職員の方が同じテーブルにつき、いろいろやっている写真が出てきたが、子どもたちは地域の子もたちなので地域の皆さんにも思いがあると思う。学校で見せる姿と地域で見せる姿はま

た違っている。地域でいろいろな行事があったときに、学校では友達の後からついていくような子どもさんが、地域の行事へ行ったらいきいきとやっている姿なんていうのもあると思う。そういった姿も含めて、学校の姿もちろんだが、学校でもコミュニケーションをとっていただいて、子どもさんをどのように捉えてどのように指示していったらよいか。時間もそこには必要でそこも大きな課題である。先生とコミュニケーションをとっていただく。その先頭に校長が立っていかなくてはいけないが、なかなかそういう機会も少なくないが、コミュニケーションが一番だと思っている。

#### 【福澤委員】

今、学校方針の話があってすごく大事なことだと思った。本校は、来週に学校評議委員会兼信州型コミュニティスクール運営委員会（第1回）を行う。校長が学校方針を説明して、当然、ご協力をお願いしますということでスタートしようと思っている。私は三区、北小区にある山口に住んでいて、北小は昔からりんご畑があり、りんごをつくっていたおじいちゃんたちがいた。だんだん後継者がいなくなってきてしまい、畑を辞めてどうしているかという、私の同級で山崎さんという人が先ほどの職場体験の受入れをしていて、たぶん小学校3年生の学習のときに全員を畑に呼んでボランティアをさせたり、りんごを子どもたちや先生全員にあげたりしている。どうしてそんなことをやるのかと聞くと、とにかく子どもたちが可愛くて仕方がないと言う。手紙なんかをもらい宝物だという。そんなことでずっと続けていくと言ってくれているが、そのように思った場合、小学校の子どもたちが可愛いことで地域の方もメリットというかそういう関係ができていくと思う。振り返ってみると、中学校が非常に厳しくて学習ボランティアに入って下さってはいるが、そんなに「はいはい」というかわりもなかなかできない。中学校もそういった地域の方に貢献、地域の方にもメリットになるようなことをやっていかなくてはなかなか長続きしない、人材も見つからないことを日頃から感じている。ちょっと考えていかなくてはならない点だと思う。

#### 【竹花委員】

それは中学校にも小学校にもいえることだが、学力を上げて結果を求められるところがある。どうしても気持ちはあっても、なかなか学校の方も時間を取れない部分もある。

#### 【福澤委員】

なかなか中学校までというと、けっこう遠慮されてしまう方もいらっしゃる。

#### 【竹花委員】

連絡を密にとってやっていくことだと思う。

#### 【関副委員長】

小学校のコミュニティスクールの関係だが、県の社会教育委員の研究会でも、やはりいろいろな市町村の発表がある。学校では直接教頭先生や校長先生と話す機会はあるが、教員の方と話す機会がほとんどない。上田市の北小学校はそれを年に3回やっている。お話の中で先生と顔見知りにな

っていろいろと話ができるようになる。先ほどスライドの話にもあったが、私もクラブ講師をやっていて、終わった後に子どもたちから去年は13人、今年は16人見ているが、一人ひとりからお手紙をもらう。それがやはりいちばん嬉しい。それから今度は子どもたちから提案があって、こういうことをやったらどうかという意見がでてきて、そういう意味では子どもたちを実践で育てているのかなと思う。

### 【早坂委員】

竹花委員が学校支援ボランティアへどのように振舞ったらよいのかというお話があった。課題が結構あるが、私たちの国の学校は、諸外国の学校に比べて子どもたちが学校の中にいる時間が圧倒的に長い。ドイツ、フランスを例にとると、ドイツはそもそも給食がないので、午前中で学校が終わってしまう。午後はどうするかというと、社会教育の中に投げ込まれている。そのメリット、デメリットはもちろんあるが、私たちの学校が子どもを抱え込むメリットももちろんあるが、かたや先ほど福澤委員がおっしゃられた不登校は、人間関係もあるし、閉鎖的になることで必然的に生じるいじめを避けることができないという学校の仕組みを私たちは持っている。その中で学校の先生ではない価値観を持った地域の方が学校の中に入れてくれるのはとても救いになるはずである。かといって、学校の先生を批判するような形で入ってくるボランティアの方がたまにいますが、そうではなく、やはりしっかりと先生方の教育方針を理解したうえで、コミュニケーションをとって尊重したうえで、互いを補う形であることが大事でありつつ、地域の方がせっかく入っていただいているので、学校の先生のような人が増えても意味がないと思う。やはりそこは地域のおばちゃんにいいと思うし、その指導や評価をしない。そばにいて走り回る子どもを元気だねって抱きしめてくれるおばちゃん、そういうおばちゃんを学校は温かく受け入れていただければいいのかなと思う。

### 【菊池委員】

前半の「縦の連携」に戻ってしまうが、実は数年前に、先ほどご紹介があった小中一貫の施設一体型で開校した佐久穂中学校でお世話になっていた。そこでは1つの施設の中に小学生がいて中学生もいる。施設は1つだが、学校としては佐久穂小学校と佐久穂中学校があり、メリット、デメリット、成果などたくさん出てきていると思うが、私は立ち上げてその後1年しかいなかったのに、具体的にどのような成果が上がってきているか検証するところまでは至っていない。同じ校舎の中に、小学校1年生から中学校3年生までが生活しているが、廊下やいろいろなところで小学生と中学生が話をしていたり、一緒に遊んでいたりと、小学生1年生の子が中学生に抱きついて、抱っこしてもらい喜んでいたり、よく見ると、中学生の方がうれしそうな顔をしていたり、そのようなことが自然に生まれてくる。実はその学校にはそれだけではなく、同じ校舎の中に小諸養護学校の分校もあって、以前から分教室が小学校、中学校それぞれにできていた。学校が1つになるということで、併せて分教室も同じ校舎の中に入り、養護学校に通っている子どもたちで、佐久穂町の周辺のお子さんたちも何人か通ってきた。そこで生まれてきたことが何かというと、佐久穂小学校の子どもたちが分教室の部屋へ休み時間に遊びに行き一緒に遊んでいる。時々一緒に給食を食べるなどそんな光景が生まれている。その学校をつくることによって地域の横の連携になるが、学校支援ボランティアを募集したところ、200人くらいの方が応募してくれた。いろいろな部会がある。安

全パトロール、見守り隊、読み聞かせ、授業の支援、いろいろな部会があり、200人くらいの方が来て下さって、先ほどの北小学校の写真のように皆さんが集まって部会ごとに話をしているようなことをした。学校の中で、縦と横になるが、これからの学校はより多様性を学校の中に包み込み、そこにいろいろな多様な世代、多様な人たちがその中にいて、その中で子どもたちが社会の多様性、寛容性といったものを自分の中に取り込んでいって育っていく、そんな環境。私は確かに学力・学習状況調査の中に謳われるような学力も大切だが、まさに社会の中に出て、お互いに多様性を認め合いながら歩んでいける、そういった学力をつけていく環境が大事ではないかと強く感じている。

#### 【中川委員】

皆様の話をお聞して私自身思っていることがあるが、学校の中で、親から見るボランティアにかかわって、しっかりと耳を傾けていなかったというような思いである。第二中学校にボランティアの方々がたくさん入っていただいているが、果たして親がそれを認識していたか、それを反省点として感じている。ただ、こういった形で今ご紹介いただいたように、もう少し、PTA側としても学校側としても話していく必要があるのではないかと思う。

#### 【金井（律）委員】

今回、前にいただいた資料を読ませていただいた段階から、自分のことを振り返りながらこの資料を見させていただいた。自分にとってとてもいい勉強になり考える部分がたくさんあった。仕事以外でも、私は小学校、中学校両方のコミュニティスクールにもにかかわらせていただいて、そういうところでもすごく自分にとっての理解というものをさせていただく時間になった。

#### 【飯島委員】

ちょっと後ろ向きな意見になってしまうが、今の世の中、安心安全というものが父兄に対して失われている。ボランティアの皆さんを受け入れ、この人は大丈夫な人なのか、そのあたりのチェック、何年か前にあったPTA会長をやって見守り隊をやっていた方が、外国籍の女の子を殺めてしまった事件があるわけだから、万が一のことも考えてその辺のフォローをどうしていくのか。それから、学校の授業の中では子どもたちは中に入っているが、外に出て行ったときにどこまで万が一のときの保障ができるのか、そのあたりはやはり大事なことだと思う。いざとなると必ず保障問題が出てくる。そこも裏の方でもきっちりと考えていただきたい。

#### 【関副委員長】

時間の関係もあるので、本日の検討内容については、このあたりで終わらせていただきたいと思います。次に進めさせていただきます。

委員の皆さまからは様々なご意見をいただきました。

次回の検討委員会だが、前回、事務局から示された「全体のスケジュール（案）」のとおり、検討体系の5つの柱の5つの柱のうちの、「⑤ 学びの環境」に係わる議論を行う予定である。

学校の適正規模・適正配置の検討や、子どもたちに残す資産としての検討を進めていく予定である。その他、委員の皆さまから、ご質問・ご意見・ご要望のご発言をお願いしたい。

○全員了承

**【関副委員長】**

本日の議事はこれにて終了させていただきたい。

最後に、次第「6」事務連絡については事務局からお願いしたい。

**5 事務連絡**

**(1) 第4回検討委員会について**

**【西澤教育総務課企画担当係長】**

お手元に日程の確認表をお配りさせていただいているが、第4回目の日程調整のために確認させていただきたい。第4回目の委員会については日程にもあるとおり、概ね7月中に開催したいと考えている。あらかじめ、この確認表に記載させていただいた日時の中で、ご都合の悪い日時について×印をご記入していただきたい。都合のよろしい日時については空欄でよい。記入いただいた確認表は、お配りした返信用封筒、又は電子メール、FAXにて6月5日（水）までにご提出いただきたい。日程表にもあるように、電子メールでいただけると大変ありがたい。詳細の詰めやお聞きしたいところがあれば、メール等のやり取りをさせていただきたい。もし電子メールでご回答いただける方については、ご面倒でも教育委員会のアドレスにお送りいただき、こちらからも送信させていただきたい。そのようなやり方もできるようにご協力いただきたい。次回会議の日程については、皆様のご都合を調整させていただき、改めてご通知させていただくのでご承知いただきたい。

**【中澤教育次長】**

桜井委員長、関副委員長におかれては、大変スムーズに司会進行をいただき感謝を申し上げたい。また、委員の皆さまにおいては活発なご意見、貴重なご提言を十分にいただいた。

以上をもって、「第3回上田市小中学校のあり方検討委員会」を閉会させていただく。

**7 閉 会**